原告団

遺族・CO裁判、災害責任追及、特集号

第百六十一号

原告団レポート

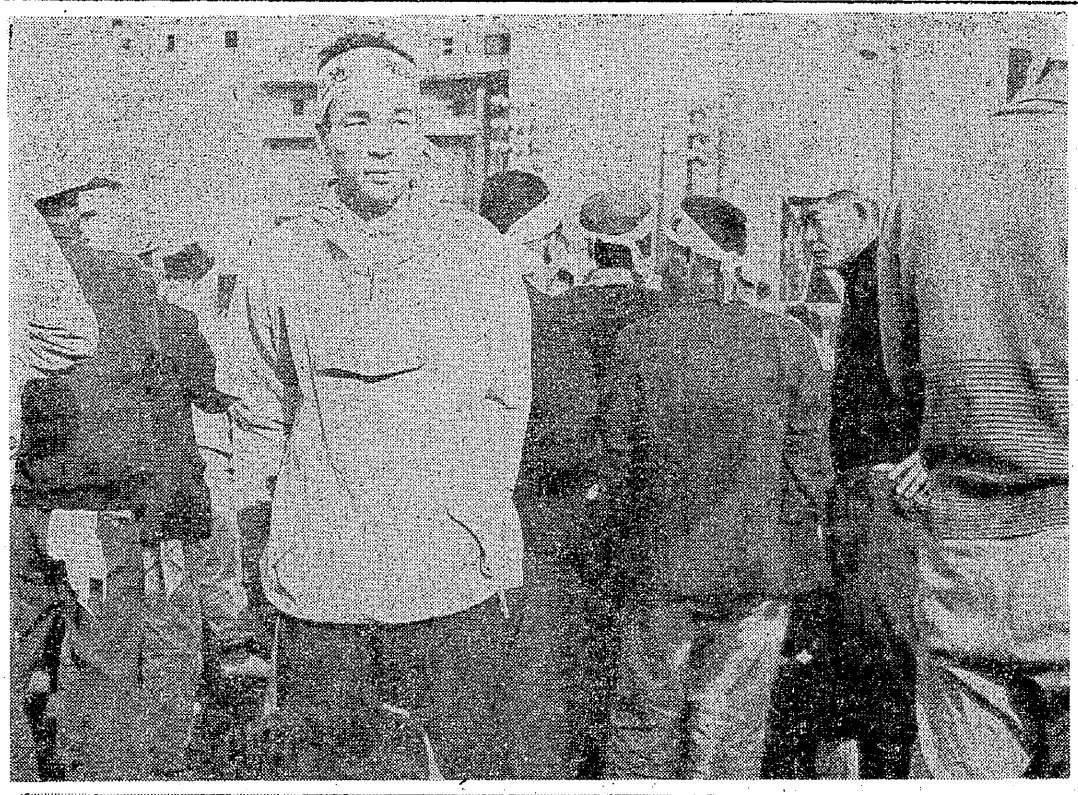
遺族――

山本 明生さん

今私はしあわせです

夫と生きたのは短かかったが、忘れぬあの日

あの人の魂が呼び寄せた



写真上は、夫の義勝さん（三池闘争のとき）。下は、まんなかが山本さん。遺族仲間の永江さん（向つて）、母シズエさんとともに。

取材の苦労

この原告団レポートも、先号のCO患者＝畑田栄さんの分ですでに百六十人余に達した。遺族の六十八人にCO患者が九十五人だ。

原告団レポートは、昭和四十八年七月一日発行の本紙に掲載したCO患者、川口幸太郎さんについて述べた分をもって、事実上スタートした。

三池大災害裁判闘争に支援を求めるにも、総勢四百二十人という原告団員の一人ひとりのその後の苦しみ、現在の生活や生きざまの実態をぜひとも全国の仲間に知ってもらわなければ……、というところから、特別に設けられたものなのである。

特別なページが設けられると、そのための取材が不可欠となってくる。事実また、編集会議で「次はこの遺族を」、「あのCO患者を」ということがきまると、本人はもちろん、そのたびにいちいち、そのほかの関係者にも会わなければならない。それも昼のうちに会えるのであればさいわいだが、多くの場合とかく夜間の取材となる。

それに原告団員は、何も大牟田や荒尾の現地にだけ居住しているとはかぎらず、北は関東一円から南は沖縄にまで、北から南へ長々と伸びる日本列島のそこかしこに散らばりながら住んでいる。取材は、これらの原告団員に万べんなくゆきわたって行われなければならない。が、今日の労働運動はまだそんなことのできる余裕などもってはいない。本紙の場合にしても、そのようなことは及びもつかぬことだ。精いっぱいの思いで、取材がきまった遺族やCO患者を求めては、これまで北は福岡や旧筑豊炭田から南は九州の端辺りまで、足を伸ばしてきた。せめてもの、こうして家に帰るのが夜も深更になるのがめずらしいことではなかった。

真実は深く

一方、たずねていった先で思うように取材ができたかといえば、必ずしもそうとばかりいかなかった。むしろ深い真実が、そこに見えているのにかかわらず、ついにそこまで立ちいる取材ができずにひき返す場合がほとんどだったといえよう。さいわいにして十分話を聞くことこそできてホッとするのもつかの間、いよいよ取材のペンをおく段になってから、「あそこのところは、どうぞ書いてもらわないように……」ときて、がっかりさせられることもあった。初めの頃はそんな場合、「そこを明らかにしないで……」、とついロに出してしまうと、それが患者の、あの恐ろしい感情の爆発を誘うことにさえなりかねぬ。そんなことがしだいにわかってきたのである。深いところにほの見えている真実を明かすことがためらわれたり、またせっかくことを打ち明けたあとで、「あそこのところだけは、どうぞ書いてもらわないように」、と口どめしなければならないなどのことの裏に横たわる、原告団員たちの苦しい思いやきびしい環境が、そのことでかえって心にしのばれてき、いっそう痛く胸に突き刺さってくるのである。だれがこうしたのか。

こうしたわけで、このレポートをまとめる作業もさることながらそのための取材には得てして苦しい思いがつきまとって離れず、取材も二百人近くにも及んでくるときたのは、昭和二十六年四月五日のことだった。大正十五年三月二十日生れの義勝さんが二十六歳、また昭和七年十二月五日生れの山本さんが十九歳のときのこと。義勝さんは、仕繰工として三川鉱の坑内で働いていたのである。新世帯は、現住所の荒尾市緑ケ丘社宅桂町三十四棟で歩み始めた。

結婚の翌――昭和二十七年十二月二十六日、長男の勝彦さんが誕生。続いて次男の友晴さんが三十年五月五日、長女の世子さんが三十四年八月十二日に生れる。

その翌三十五年には、三池闘争開始。一家は、その溶鉱炉のなかできたえられる。だがそれから三年目――三十八年の十一月九日に起きた大爆発のため、文字通り一家の大黒柱だった義勝さんが命をひと呑みにされてしまい、残された家族たちは思いも寄らず、悲嘆のドン底にたたき落とされたのだった。

突然の不幸

気がつくと、自分の手のなかに幼い三人の子どもがいた。長男の勝彦さんが十歳で小学三年、次男の友晴さんが七歳で小学一年、末っ子の世子さんにいたってはやっと三つになったばかり。

さいわいなことに、彼女の実母――田中シズさんがその日かけつけてきてくれ、余りにも大きな悲しみに打ちひしがれてしまった山本さんを、その夫の義勝さんにこそかわることはできずとも、けん命にささえてくれて助かった。実母のシズさんはついに実家に帰る日を見うしなってしまい、そのまま今日にいたるまで、同家になくてはならぬ家族として住みついてしまったが……。あの日、突然に降って湧いた不幸は山本さんには余りにも大きかった。

今の思いは

悲嘆のドン底に落ち、一時はぼうぜん自失してしまった山本さんは、同じ運命に泣く遺族仲間と手を取り合いながら立ちあがり、やがて、遺族の生活対策の一つとして誘致されたアソニットへ。

おかげで今、長男の勝彦さんが二十八歳で昨年結婚、福岡で働いており、次男の友晴さんは二十五歳で東京に。二十一になった末っ子の世子さんが母親、祖母とともに暮らしながら、大牟田の一企業に毎日仕事に通っている。山本さんは、今底抜けに明るい顔でいうのである――「これまで、母とケンカしながらやってきましたけど、子どもたちもやっと成長して、それぞれ生きる道を歩いています。私は、今がいちばんしあわせです。ほんとうに、今がいちばんしあわせです」。

呼んだか魂

それにしても、忘れられないのはあの日のことである。

三川鉱炭じん大爆発の日、夫――義勝さんの冷たい遺体があがってきたのは、たしかその夜の十一時過ぎだったようだと、彼女はおぼろげな記憶をたどる。

救いの手を差し伸べてきてくれた、亡夫の義兄――井上忠光さん（けい肺のため、荒尾市内の一病院で長い療養生活中）のバイクの後ろに乗って、義勝さんの消息をそこかしこたずねまわったあと、彼女は呆然として三井大領病院の玄関付近にたたずんでいた。

同病院は、今や野戦病院と化していた。トラックに積まれながら重軽傷者や犠牲となって坑底で死んだ夫――義勝さんの許へ腰入れしてきたのは、昭和二十六年四月五日のことだった。大正十五年三月二十日生れの義勝さんが二十六歳、また昭和七年十二月五日生れの山本さんが十九歳のときのこと。義勝さんは、仕繰工として三川鉱の坑内で働いていたのである。新世帯は、現住所の荒尾市緑ケ丘社宅桂町三十四棟で歩み始めた。

結婚の翌――昭和二十七年十二月二十六日、長男の勝彦さんが誕生。続いて次男の友晴さんが三十年五月五日、長女の世子さんが三十四年八月十二日に生れる。

その翌三十五年には、三池闘争開始。一家は、その溶鉱炉のなかできたえられる。だがそれから三年目――三十八年の十一月九日に起きた大爆発のため、文字通り一家の大黒柱だった義勝さんが命をひと呑みにされてしまい、残された家族たちは思いも寄らず、悲嘆のドン底にたたき落とされたのだった。

突然の不幸

気がつくと、自分の手のなかに幼い三人の子どもがいた。長男の勝彦さんが十歳で小学三年、次男の友晴さんが七歳で小学一年、末っ子の世子さんにいたってはやっと三つになったばかり。

さいわいなことに、彼女の実母――田中シズさんがその日かけつけてきてくれ、余りにも大きな悲しみに打ちひしがれてしまった山本さんを、その夫の義勝さんにこそかわることはできずとも、けん命にささえてくれて助かった。実母のシズさんはついに実家に帰る日を見うしなってしまい、そのまま今日にいたるまで、同家になくてはならぬ家族として住みついてしまったが……。あの日、突然に降って湧いた不幸は山本さんには余りにも大きかった。

今の思いは

悲嘆のドン底に落ち、一時はぼうぜん自失してしまった山本さんは、同じ運命に泣く遺族仲間と手を取り合いながら立ちあがり、やがて、遺族の生活対策の一つとして誘致されたアソニットへ。

おかげで今、長男の勝彦さんが二十八歳で昨年結婚、福岡で働いており、次男の友晴さんは二十五歳で東京に。二十一になった末っ子の世子さんが母親、祖母とともに暮らしながら、大牟田の一企業に毎日仕事に通っている。山本さんは、今底抜けに明るい顔でいうのである――「これまで、母とケンカしながらやってきましたけど、子どもたちもやっと成長して、それぞれ生きる道を歩いています。私は、今がいちばんしあわせです。ほんとうに、今がいちばんしあわせです」。

呼んだか魂

それにしても、忘れられないのはあの日のことである。

三川鉱炭じん大爆発の日、夫――義勝さんの冷たい遺体があがってきたのは、たしかその夜の十一時過ぎだったようだと、彼女はおぼろげな記憶をたどる。

救いの手を差し伸べてきてくれた、亡夫の義兄――井上忠光さん（けい肺のため、荒尾市内の一病院で長い療養生活中）のバイクの後ろに乗って、義勝さんの消息をそこかしこたずねまわったあと、彼女は呆然として三井大領病院の玄関付近にたたずんでいた。

同病院は、今や野戦病院と化していた。トラックに積まれながら重軽傷者や犠牲となって坑底で死んだ夫――義勝さんの許へ腰入れしてきたのは、昭和二十六年四月五日のことだった。大正十五年三月二十日生れの義勝さんが二十六歳、また昭和七年十二月五日生れの山本さんが十九歳のときのこと。義勝さんは、仕繰工として三川鉱の坑内で働いていたのである。新世帯は、現住所の荒尾市緑ケ丘社宅桂町三十四棟で歩み始めた。

結婚の翌――昭和二十七年十二月二十六日、長男の勝彦さんが誕生。続いて次男の友晴さんが三十年五月五日、長女の世子さんが三十四年八月十二日に生れる。

その翌三十五年には、三池闘争開始。一家は、その溶鉱炉のなかできたえられる。だがそれから三年目――三十八年の十一月九日に起きた大爆発のため、文字通り一家の大黒柱だった義勝さんが命をひと呑みにされてしまい、残された家族たちは思いも寄らず、悲嘆のドン底にたたき落とされたのだった。

結婚生活

遺族の山本明生（あけみ）さんは、荒尾市緑ケ丘社宅桂町三十四棟に住んでいる。同市の妙見にあるアソニットへ、バスでの通勤。

山本さんが、あの三池三川鉱炭じん大爆発の犠牲となって死んだ夫――義勝さんの許へ腰入れして

自分の手で

そこで彼女は気をふるい起こして、係の者が固くおしとめるのもきかず、夫の冷たい遺体につき添いながら遺体処理場のなかにまではいった。妻の自分の手で夫の遺体を洗い清め、側で手をかしてくれていた看護婦が、気をきかしてどこからかさがし求めてきてくれた数珠も、御賽銭袋とともにちゃんとかけてやることができた。

「あの修羅場の騒ぎのなかで、すべきことをやってあげることができたのが、私としてはせめてものことでした」、と彼女。

遺骨は今？

あれから十七年。亡夫――義勝さんは、近くの光明寺の納骨堂に、つとに鬼籍にある実父母やきょうだいたちとともに眠っている。早や、山本さんは四十八歳。

病院の庭でトラックからおろされた遺体が三つ、彼女の目の前を通り過ぎて、その日遺体処理場に当てられていた耳鼻咽喉科の処置室のなかへ吸いこまれていった。

そこへ、またひとつ遺体が運ばれてきた。

「たしかに、魂が私を呼び寄せたのに違いありません」、と彼女はそのときのことを述懐するが、彼女はタンカのうえに毛布ですっぽりと包まれたその遺体に、どうしたことかいきなり心を吸い寄せられ、思わず走り寄っていくと、毛布をあけた。まごうかたなく、夫の義勝さんだった。

「眠っているものとばかり、そのとき思いました」と彼女。こみあげてくるうれしさをかくすことができず、「あ、お父さん。よかったネ、助かって」といいざま、夫の体にしがみつくと、そのとたん彼の頭部はぐらりと片方にかたぶいてしまった。義勝さんは、生きていたのではなかった。

が、ぞくだくと運びこまれてきた。